

本朝武林原始

劔刀之部
弓矢之部

上

庫文閣内			内
一五三函	二五八三	和	第
一〇三架	三三三號	書	下
		書	三
		類	共

和書門		
二五八三	九七三	類
三三三架	函	號

内閣文庫		
番號	和	25183
冊數	3 (1)	
函號	153	281



日夏繁高先生著

本朝武林原始

浪華府

文金書堂

練武叢書第二集

爲

明治十一年購求

兵家記事珠序

珠也者世之至寶而人之

難求者也事物之極其本

知其要亦至寶也世知其

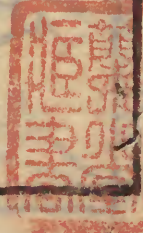
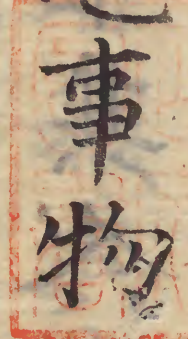
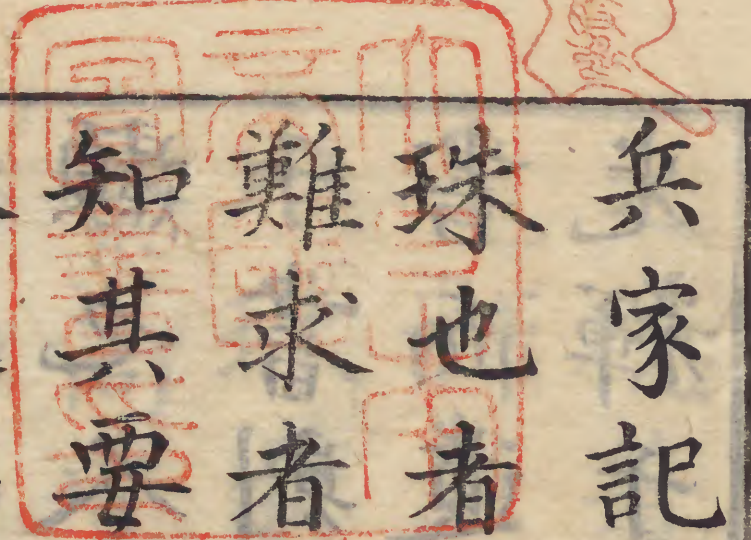
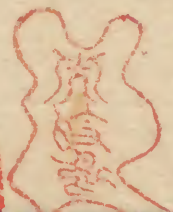
珠之為寶而不知其事之

為寶也人之知其事也如

本朝武林原始

卷之二

一



珠之光輝照世而長不盡
矣無照世之功則珠德不
顯也人亦知其事而不筆
于書則唯其人而已筆于
書而遺之後世以其功用
光輝于後世者必矣是人

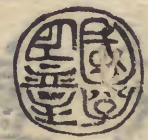
之德著明者也蓋非珠之
光輝照世者何哉此書之
以珠表者我其意也日復
繁高曾記兵家器具之事
始而為八卷請序及其名
于余故假張氏記事撫珠

之趣以題一語而擴其意

云爾

享保八年二月下旬

朝散大夫林信充識



兵家記事珠叙
兵家記事珠八卷日夏繁高先生
所撰述也祭酒林君作之序曰珠
也者世之至寶而人之難求者也
事物之極其本知其要亦至寶也
遂署其名曰記事珠蓋取諸張說
記事撫珠耳竊惟近世譚兵者類

本朝武庫乃如
卷之
余
非秉兵權之資而要俾矯誣鑿空
取信乎後生是以假其名術其術
或曰祕訣或曰家傳臆斷百出都
無所徵所謂無稽之言也果若是
則亦欺人矣哉日夏先生不然天
資恭敬敦篤幼學軍旅之事汎覽
本邦之書凡起六史謹嚴迄前修

緒餘百家圖錄稗官小說無不涉
獵官暇講餘抄錄羣籍旬儲月積
著兵家原始一部旌旗甲冑刀劍
弓矢宛極端倪纖悉無遺間有考
證未精史傳無載闕疑不錄蓋以
其訓詁精其證據覈可使萬世制
武器者溯流求源故述而作之豈

帝兵家之領袖我抑亦郭璞張華
之後所宜取證也編就將壽梨棗
以傳徵言於余輒書其纂述之梗
槩以贈焉享保甲辰夏四月國枝
齊賢叙



... 國枝 ... 齊賢 ...

夫日中ハ武を嗜乃國なり神代の古瓊矛故以て玉と用
こ麻四弓眼く之は用て暴悪乃神を誅也材雲劍以
以て寶祚守るに磐余彦帝女軍男年を帥く不順
劫と平げ日本武尊と草薙劍と携と東夷故征す其
武徳内り隆く... 兵勢外に敷が利中世武備
漸おと... 獨記既小み... 淳厚氏又を弊に弊... 於是
此邦乃高法故武及び沙家史記録傳書... 即く
おほく... 淳厚氏の名に... 故... 言皆
妄談... 近世文明の時... 漸淳厚氏乃世故中...
人を欺く事... 妖言... 其心趣を

求めむと欲する者何れをいへども元我國の舊典
奉法をいふをいへば又無稽の私多し一五瀬命を指し
交わつてこそ血鞆深し一故吳皮以て指をばく
なふこつ子類をいへば日本紀にみぬ命後天ふあつり
ゆふまはりれども其血拵が血深なること事なき
めゆし且けついでに鞆の具あはれなること或は用明帝
豊前國宇佐にて流竊るは射法といふ此より又國史
よかり一或は鞆に龍首は万向兜ハ大将の具とて後土
用ゆべしとす如是の記不可勝計皆て無稽の云はし
と本撰とあるにきく或はとも書にありて其記を

不知とのありては好事者私に之を記録し其
形を擬作しと吾家乃傳文が事といつりおもしろ國
史実録及雜記をも見ざる事誠自家乃傳文の事
其世に欺くことあり或や今世神古は講むる人も此
一件とりかた舊記をも之を吾家の傳記とすといふ
乃類を誠と同日之誤するべし一すべし傳文といひは誤
りといふことごとく本に記す事ハ微するに
はよく舊法と違し一故實伝の者をも本撰に
其必其かたはあり又常と事撰するハ別なり
すふはしる誠とする小撰しき人云ふ事

嘗と暇日西史実録より野史雜記よりと申授ふ事
つて此事を記すは其意乃為り一書成作るとして
文上意く才は其河や多事多かたべし
りく事ぬまう様し以人此訂訂成傳といふ事と
享保八癸卯年孟春日一日夏四郎左衛門繁高

凡例

凡例

- 一 凡兵家の事物各起源あり是れを要るにせり
- 一 後多しといふも其源を西域乃故事を以て傳ふ
- 一 本をよみて末によりおかく
- 一 西朝の事實を窺ひず其の如く三書五國史小史なる
- 一 兵家器械等其指輿をす人々其心又野史釋説に
- 一 裁きりて採摘あり是を記して監賜とすおもふ
- 一 九牛の一毛なり也
- 一 正史實録を本授りて其後高き後致さず小史
- 一 雜史此中より採りてたてて採るに思ひざるを

本草正木原始

後の君子乃参考に備へて其梗概をなさんるに
本年記大全法に依りて根原を以て悟流私言に似る
ものも記載せりしなり一是備へ道法を以て
考へりし

一此編ハ二百有餘部の典籍を涉獵し二百四十餘
條の起原を括套と西土の書法求めりものは事物
紀原古今原始等世の初と終と由りて

日夏繁高識

本朝武林原始總目錄

卷第一

劔刀之部

劔

太刀

鞘纏

比喩

鐔

打刀

横刀緒

刀

大太刀

紫柄

小刀

尻鞘論抄

脇指金

刀緒

本朝武林原始

卷第一總目

三

燧袋

筭

目貫

脛膝金

相刀 磨刀

刀莖鐫姓名

目錄太刀

牙

籬刀

槍

卷第二

弓矢之部

弓

弓造工

天鹿兒弓

天梔弓

本陣三角石弓

桃弓

楓弓 梓弓 檀弓

九錫彫弓

波摩弓

塗弓

荒木弓

角弓

御多羅支

弓束箱

鈞

紫鳥打

弓袋

弦袋

關弦

弦卷

弩

村裡夫

矢

鏑

引目夫

征矢

末利矢

片手折箭

丹塗矢

火矢

野矢

候野矢

的矢

磁頭

中刺

節陰矢

護田鳥尾矢

塗籠矢

手突矢

白磨銀箭

木鋒

矢印

得物矢

爪寄

作矢

鏃

平題

麻麻伎

鞞

鞞袋

鞞張

鞞

鞞

鞞作

鞞

惠比良

矢立硯

方立

矢把

調度掛

矢籠

數革

行騰

卷第三

射事之部

矢呼聲之稱

參產屋鳴弦 引目

騎射

笠掛

犬追物

的 身是矢

弓場

深

二五度

小弓

鳴弦

宿直引目

流鏑馬

牛追物

艸鹿

餅的

的場

手挾 八的

丸物 小串

矢開

百倒 善

込矢 直連矢

射禮

卷第四

馬具之部

鞍鐙

鞍造

舌長鐙 舌短

移鞍

賤鞍

遠矢 指矢

矢伏間

貫革射

和馬

羈

鞆

壺鐙

唐鞍

和鞍

作鞍鐙

大月... 卷之一... 五

九章正木原方 卷之一

鞍褥

鞦韆

鞍

銜

馬鎧

行槽

卷第五

馬事之部

日向駒

額田馬

覆鞍

障泥

鞭

手綱

馬刷

底板

駒場

甲斐黑駒

移馬

飭馬

神馬

二毛馬

印

馬醫

焦頭毛

卷第六

著具之部

甲冑

牛革甲

走馬

乘馬

染毛

相馬

馬司

岩乘

東野

四馬

鎧作

挂甲

本朝武原始

卷之一 總目

六

頸鏡

唐革

楯無

兜緒

半背

喉輪

肩罩

脰楯

膝鏡

威

八領鏡

四姓威

兜纒附

龍頭高角

頰楯

臂罩

佩楯

脇楯州摺

梅檀弦走

總

胴先緒

腹卷

樣札

皆具

著籠

鏡直垂

四幅袴

揉烏帽子

連貫

高紐

腹當

胴丸

著長物具

具足

小具足

大口

小袴

晉丁頭巾

鞞子

本朝武林原帛

卷之八

脛巾

鎧韓櫃子

保侶

笠標

差物

續松

重著兜

衣中服鎧

奉甲

毛波也

天平革

正下革

采牌

保侶袋

七物

糲袋

兜下著烏帽子

重服甲

混黑

著大將甲

鎧著初

鎧餅

卷第七

備器之部

鮪旗

旗銘

蟬本

馬幟

金鼓

楯

卷第八

旌旗

旗袋

乳付旗

幕

軍令

林朝武林原治

卷之一 總目

卷之九 兵事之部

男軍女軍

軍令

陣法博士

陣法

節刀

賜旗

賜采牌

賜扇

城郭

軍將

講武

武藝

氣

雁亂列

赤剛臆座

皆化粧

野猪武者

武田家陣法

總目終

本朝武林原始卷之一

日夏繁高 著

劔刀部

時本書紀曰八握劔九握劔蛇麤正劔神戶劔頭槌

劔天叢雲劔

七武曰瓊矛之畫殿馭寶劔之除妖魅者是兵器之

始也

舊事記曰天目一箇神造刀

本朝武林原始 卷之一

日本紀神武帝紀曰部靈神功帝紀曰七枝刀欽明
帝紀曰金飾刀

案此刀之部靈或ハ布都主神魂刀又佐士布都豐布
都獲布都建布都之ハ高倉下命神武天皇ハ
子ノ刀也大和必石上社ノ納ら家後小常陸蘇島神宮
以移之也神宮正統記ノあり今彼神庫ニおき海
基利一洗又刀ハ大室子中大和國宇多天國寶剣を
割之刀と云ハ北地刀ハ片カ此訓カ也

太刀

日本紀曰垂仁帝三十九年五十瓊敷皇子居于茅

渟菟砥河上而喚鍛冶名河上作太刀一千只推古

帝廿年正月條曰多智奈羅磨勾禮能摩差比釋曰

曰勾禮能者吳也私記江家次第詩繪太刀螺鈿太刀饒太刀鳥頸太刀野

太刀曰摩差比者良劍之名

延喜式大神宮神寶條玉纏横刀須我流横刀新作

太刀又彈正臺條凡畫飭太刀五位以上聽之又云

凡刻鏤太刀非新作聽五位已上著用主稅條造太

刀一口長サ二尺料鐵十斤五兩鞘料鐵一斤馬革一

條長サ二尺五寸絲一兩膠一兩漆一合絞綿一兩緒料

寸廣サ五寸

鹿洗革一條 長三、尺 廣六、寸 內匠寮條御太刀一口 料堅鐵

一斤五兩裝料銀大五兩 絞皮一條 長六、寸 廣三、寸五分 椎一

枝 長三、尺五、寸 廣三、寸厚一、寸 鹿革一條 長三、尺五、寸 廣七、寸 膠小二兩 漆

二合絞漆帛二尺 綿六兩 調布三尺 長功四十三人

鍊工十八人 銀九人 革中人 功五十人 小半 工四、十一

二人 漆六人 人夫八人 小短功五十七人 工四、十七 兵庫寮條二季大被

橫刀八口 金裝二、口 烏裝六、口 其料鐵二十四斤 別熟銅四

斤 練金一分 銀一兩 水銀一兩 鹿革八條 各長二、尺 五、寸 廣四、

寸 生絲小十五兩 纏柄 漆八合 膠四兩 已上 猪膏五

合 瑩刀 胡麻油一合 洗刷 生施一尺五寸 調布一尺

五寸白綿小九兩 已上 絞伊豫砥二顆 麤砥二顆 稟

八圍 已上 磨作功二百五十人 金裝口別二、十六人 烏裝口別二、十三人

烏裝橫刀一口 長功二十一日 中功二十五日 短功

二十八日 打坏一日 手、刀 破兼合兼并打刀二日 手、別

刀二 剪并 錯四日 麤砥磨一日 燒并中磨一日 精磨

一日 瑩一日 鐫鞘裏革一日 元漆三遍 每遍塗乾一

日 中漆二遍 每遍塗乾一日 作鉸具二日 麤錯精錯

并燒塗乾漆二日 搓線并纏柄中漆一日 柄鞘花漆

一遍 一日 著鉸具及柄一日 漆太刀

公家名目 鈔白飭太刀 木地螺鈿 劔蒔繪螺鈿 太刀

種螺鈿太刀 蒔繪細劍螺鈿野劍蒔繪野太刀 或平

刀或毛拔形太刀 沃懸地太刀 黑漆太刀

案ずるに盛衰記云赤桐作右刀ハク桐作右刀ハク細躬作右

刀衛府左刀長慶輪太刀左平記云兵庫錄左刀衛府作

左刀小竹作右刀前繪平鞘太刀白覆輪左刀白左刀貝編

右刀賊作左刀虫盡左刀何々

十大太刀

日本紀武烈帝紀云飲褒陀致鳴多利播枳多檄氏

農哥備登慕譯曰大太刀誰須衛波陀志氏謨阿波

夢登茹於謀賦譯曰未

鞘纏

同崇神帝紀出雲振根擊弟飯入根而殺之故時人

歌之曰椰句毛多菟伊頭毛多雞流餓波雞流多知

菟頭羅佐波摩枳佐徵那辭珥阿波禮

釋日本紀曰椰句毛多菟八雲立也伊頭毛多雞流

餓出雲梟帥也波雞流多知佩太刀也菟頭羅佐波

麻枳葛鞘纏也言上古以葛纏太刀刀之柄鞘以漆

塗上今之鞘纏之體也佐徵那辭珥差成也

紫柄

古語拾遺曰至於長谷朝倉朝秦氏分散寄隸他族

秦酒公進仕蒙寵詔聚秦氏賜於酒公仍率領百八十種勝部蠶織貢調充積庭中因賜姓宇豆麻佐註仍以秦氏所貢絹纏祭神劔首今俗猶然
日本紀垂仁帝紀后母兄狹穗彥王謀反欲危社稷因伺皇后之燕居而語之曰云云願為我弑天皇仍取七首授皇后曰是七首佩于裯中當天皇之寢迺刺頸而弑焉
同垂仁帝紀天日槍將來物出石小刀一口天智帝

紀其大氏之氏上賜太刀小氏之氏上賜小刀
江次第曰柳宮盛硯筆墨小刀
東鑑文治六年十月十三日於遠江國菊河宿佐佐木三郎盛綱相割小刀於鮭楚割居折敷以子息小童送進御宿
交本集公朝 今の家も存をりやうなる小刀の世も伝
りいれぬ月さうなり
新六帖 かちとさき乃ちさきとちりぬ小刀の世もまえ
とあそ思ひ伝
日本鐔師の巻曰く
日本鐔師の巻曰く

日本紀神代卷曰劍鐔垂血激越為神

其本集信實 〇ハ又さうさや口いあひつゝあ

りりするかなさるるなり

案ずるに鑿束書に案禪洗鐔あり参考保元物語西

八部為胡練鐔其黒塗大刀盛衰記に筒井淨妙黒塗

大刀三尺五寸ありに練鐔入を楯原景季練鐔の太刀

佩て康安岡本下向の條に於て金鐔の太刀以康安

に賜ふ参考太平記に楠正行吉野に参り一人も

其鐔をさくくと有り

其鐔

江次第曰鹿皮尻鞘魚形尻鞘斑猪尻鞘無繪尻鞘

臨時競馬條左右乘尻各十人騎馬相向其裝束繪

尻鞘 左鰐 右魚

萬葉集 劍後鞘納野邇葛引吾妹真袖以著點等

鴨夏葛川母

新六帖 以まがしと申るをわうんちりさくのさ

もあはれり抄あききハ

案より参考保元物語に西八部為朝熊皮尻鞘

以れ蓋表記筒井淨妙熊皮尻鞘綴喜太刀四部四

尺六寸の太刀に熊皮尻鞘畠山重忠三尺六寸の太刀

に虎皮尻鞘より里太平記は火塔交兵庫録志尻鞘
太刀に虎皮尻鞘けしる太刀懸の事不徳くさけ新房
つ通世の條は馬副口入袴皮尻鞘の太刀佩く又何保
肥前守三人五寸の豹皮乃尻鞘くさる金作結太刀
佩りえとあり

打刀

平家物語は乗園坊等秀衣下小萌惹おわいの勝巻
大なる打刀やへしはさきかき
盛衰記は乃乃生衣のかきおしは腰圍る小赤地の鎧
虫垂小白金物うちきる黒系威の後きうら刀あり

さ

東鑑曰上總五郎兵衛懐中帶一尺餘打刀

温棄妙は是となくして大なるを神志かこいふ打刀といふ名
古記の乃乃寸を比ぶかきたるあや古人の短刀を
くなくして野太刀を云わたり若し短刀はと打刀といふ
案どるに平家物語は清盛公はむどと柄の刀を志るは
後きとくさるまに云るもおも

脇刺

平記は南都の衆徒は西に脇刺の太刀なると用き
法事なればゆきとつきと切てかぬ

明德記云將軍家ハ條作云御之々せよ二の終いふ御
を刀以二振う之々々せよ茶研等が〜と云侍り云
び〜を侍せき多ふ

横刀緒

延喜式曰凡囚獄司物部横刀緒色胡桃漆

續日本紀靈龜元年九月詔禁文武百寮六位已下

用虎豹熊皮金銀飭鞍具并横刀帶端但朝會日用

者許之又曰凡横刀鐵者以絲纏造勿用素木令脆

焉

刀緒

延喜式曰凡衛府舍人刀緒左近衛緋絶右近衛緋
纈左兵衛淡緑右兵衛淡緑纈左門部淡縹右門部
淡縹纈

燧袋

古事記曰倭比賣命賜州那藝劍御囊於倭建命而
詔若有急事解茲囊口故到尾張國云云到相武國
之時其國造詐白於此野中有大沼住是沼中之神
甚道速振神也於是看行其神入坐其野爾其國造
火著其野故知見欺而解開其姨倭比賣命之所給
囊口而見者火打有其裏於是先以其御刀切撥州

以其火打而打出火著向火而燒退還出皆切滅其

國造等古本裏書云兼文案之今世俗号命之火打囊付于刀二者可以爲此因緣也

盛衰記又倭姫命天村雲劍を日本武尊に身授之村

雲切之錦袋被附之今此世も腰刀之錦袋の赤

皮を下と燃袋といふ事此の如かり

太平記も青紙た清の夜お入るかはしきる心も燃袋

に入ら持る袋を十文取之滑河(落)きり

又云短懸する白太刀柄鞘等金ふく打ちとさる刀り虎

結皮の火打袋袋さげするもさるる

以て辨カサキ曰く八幡神合入に能く此の辨強本此辨

吉三十一社并猿六十六箇其細密也非言語之所

及也遂聞義教公公一覽之爲奇則免其罪使出獄

則命祐乘以金銀銅使造粧刀劍之具是俗所謂目

貫髮搔小柄也是稱三所物其所彫刻之花鳥人形

真如生也世人甚爲珍前所謂桃核今在常陸國土

人爲日吉社之神云其次宗乘光乘特爲傑作祐乘

與古法眼元信同時家居亦相近故欲彫刻人形花

鳥則先使元信寫其圖而依其樣彫之元信之粉本

并榮徳之畫本于今在赤齋之家到今八代連綿凡

斯一家之所造世謂家作今見祐乘畫像在末齋者

則著烏帽子蘇芳然則祐乘始諱而剃髮後直以音呼之者乎

案あつた後一族勢多かり相續の以末始

○祐乘 後藤四郎兵衛永正九年五月七日卒 七十八歳

宗乘 四郎兵衛 乘真 四郎兵衛吉久永祿五年二月六日卒五十八歳

尊乘 子孫絶

光乘 四郎兵衛光家 元和六年三月四日卒九十二歳

元乘 子孫絶

德乘 四郎兵衛天正九年九月十三日秀吉公賜食邑寛永八年十月十三日卒八十四歳

長乘 七郎兵衛 六十六歳其時

案笄連冠於髮也俗作衡笄俱非也當作髮搔

搔髮記曰大納言仍成いさご殿上人をとおし守り記
交方中ねいさごいさごわりりまかん殿上にあを合とさ
りねくけ成の冠打落し小庵に投すをぎりけ成いさ
がすまごま殿はををりく冠をくまよそをかうあ
してゆりまがされよりかうがいねいさご髪はくろいさ
か後りていかなれ事とせゆんきまらにかりかば
能媛小ありのるさるまらねえゆりぬ先ぢのあさ
りさ後のもろまゆりるんさるりくいせれ
今芳物記曰今ハ昔を法傳ニ春近といふ舎人まきり翰

をなん... 雙小... 小市... 一感...

案... 雍州府志曰... 廣院義教公... 時季夏暑氣逼肌... 與祐乘祐乘大悅...

立乘 七郎兵衛

益乘 七郎兵衛 光次 海乘 三郎四郎光綱

清乘 順乘

光定 七郎兵衛

覺乘 圓乘 勘兵衛

光平 清左衛門

光武 三左衛門

乘兼 光則 瀨兵衛

昌乘

榮乘 四郎兵衛 正光 元和三年四月四日卒 四十三歲

本朝武林原始... 卷之一

顯乘 理兵衛正綱雖為榮乘弟則乘早世故續嫡家寬文三年正月廿二日卒七十八歲

琢乘 石乘

傳乘 光良 孫左衛門

休乘 作乘 源兵衛

運乘 光澄 三郎左衛門

林乘 光方 半左衛門

九 程乘 理兵衛光昌

寬乘 俊乘 八郎兵衛光永

役乘 或作股乘

仙乘

悅乘 理兵衛光邦

七 則乘 四郎兵衛光重 寬永八年十一月十三日卒三十三歲

十 廉乘 四郎兵衛光侶

泰乘 次左衛門光近

乘賢 源四郎 四郎兵衛光喜 早世

十一 通乘 四郎兵衛光壽

目貫

拾遺集神樂哥 白く祿の目貫のちりふさうけをきて な〜此れをり〜ハた〜子

脛膝金

蓋表記之飛澤を所左清の景高ハ脛中金より太刀より
打き自貫

相刀

磨刀

盛衰記に相言相政多有り悪業の督信頼ハ欺て、系
劔之入るるより、頼政弓矢の身より、ゆるかき、
ゆるく、あやむい、と、

羅山文集曰木屋光保請余曰俗傳稱文武帝大寶
年中召和州宇多郡天國摸造寶劔納之熱田宮平
城帝大同年中豊前國宇佐宮沙門神息有心匠分

利劔以爲刀以來諸州置鍛匠焉後鳥羽院朝廷掄
其良者易日代番所謂鎌切乙丸櫻丸之屬是御劔
之號也時有洛陽人澤田國弘者善巧發劔故磨礪
乃劔焉後小松院時宇都宮三河前司能相刀劔辯
新舊撰真偽觀好惡察利鈍僉云我朝之番煥也著
書五卷以述其法國弘八代孫助安在尾州就前司
學其術先是世爲磨工至助安兼得識鑿於是表其
樞要著書二卷以泄其秘助安八世胤常堪分正氣
火氣之品復著書而教之于其子常長是爲家傳常
長者光保曾祖父也

雍州府志曰妙本阿彌元相州鎌倉之人而天性得
相刀劔之術從等持院尊氏公來京師普廣院時文
明年中妙本末裔有清信者一日義教公將赴赤松
滿祐之饗應于時所帶之中刀自拔乃命清信令迫
之倭俗以テ片紙或ハ木片ヲ清信雖緊迫之自拔及第三
度是則逢赤松害之前兆乎義教公不解之大怒以
為清信之用心淺而囚清信于時日親亦令入獄清
信聞日親之說法甚歸依之爾後二人共出獄清信
剃髮日親授法號名本光本阿彌元姓菅原氏松田
自元祖妙本代代相刀劔專磨礪清信為傑出凡妙

本以後不稱松田而直本阿彌為氏一家祝髮後使
冒光字於諱上者取本光之光字者也又曰本阿彌
光悅能相刀劔甚得磨拭之術凡本阿彌家之三事
第一相刀是和俗謂日利第二磨礪是謂磨第三淨
拭是謂拭是也相刀易為之磨礪次之至淨拭甚為
難光悅兼三事特長淨拭之事且精筆法而作一家
世稱光悅流八十有餘而又曰光甫本阿彌家之
三事其兼能之其內淨拭法超祖父光悅世人見之
必知光甫之所為也凡不名而知其人之所為是非
常之巧手也又曰凡擇刀刀之新舊真贋則嫡流本

阿彌某宅聚一族相共撰擇之定眞實并莖無治巧
 之名則擇其所作之巧謂何國誰某之所作也倭俗
 是謂日利於茲本家嫡流一人出折紙其法白紙橫
 折之其中央書鍛工誰某作而價幾何也其終貼下
 凡價黃金五枚以上稱折紙自黃金一枚至四枚
 之札物白紙細切之表記誰氏作代幾何也

案由ふか阿休修匠ノ小笠原松あちとの人刀鉏を
 貝利と妙本に傳ふ妙本より本妙妙秀妙本
 光老心光利老堂光温老常とお後と光常実ハ光
 温が孫として光遠が子なりと光遠が世は修く光温が

とある家伝つゝ光悦の庶子なりと光悦光温之弟と

相傳ふといへり

刀莖鑄姓名

今義解曰凡營造軍器皆須依樣令鑄題年月

及工匠姓名謂樣者形制法式也鑄者鑿也題者書也若有不可鑄題謂

箭等者不用此令

案すりに刀鉏より甲冑鞍錠の類まで其治工兩人の姓

名は鑄るものと事由來む

目錄太刀

書礼曰汝曰た刀目錄のり麻苑院殿の時よむと世多溢

に改くらゝ家盛なかりしより其を方目録法沙に
何れも著しく戎象の聘物不用らるるより其を
く天下にありぬく通用をたてしを上たると中比ぞハ
な此事あり

牙槍部

牙戟之用蓋出自刀劍之屬故附焉

矛

國史所謂天瓊矛茅纏矛著鐸矛廣矛國平矛比比
羅木八尋矛嚴矛天鞋槍長槍鯨尾槍鎌槍

薙刀

薙刀

後三年物語に龜沼が長刀のまゝをきりに何の家やう小
丸のやうに飛次よりひきまゝに巻武が長刀けききに
かりとる

栗家物語に清蓋云安藝の藪島は神より物一煙
るる薙刀

盛衰記に杉朝つ白令の小短巻一多る長刀は加藤
景康またよ

案のふ薙刀は号正史にんず又あ力をお物とを
久し平家物語に能くも教養とらめらとらとら
ふれども短刀きんぐよなりとらぬらとらありとら

記曰野米与一兵清入乃極玄ハ四尺三寸のハ把作リ此
を刀楓と柄も昔人をもて之の徳兼忠刀右の服より
あつて之身こころ

槍

或記曰右大將嘗製長槍投鳥津忠久俗号二十
一文一字

参考太平記三井寺合戦の条より三方れちぎ極よる槍は刀
とさしあつて又佐吉合戦の条に河間了然が柄の長さ
一丈むらりに尺こころ槍小合儀つまこ家鎗馬の平首り
川を之と

葉あつた槍の号むきし三葉宗近の作る石戦槍百

本形千本形あり室所家の本をもつ槍は用おき
右の弓矢にかゝるを袋槍いふやうなる物と云者に始
まる一説修教紀伊守より起るものも今も今も
承の佐人天少邸俊長と云鍛冶槍は仍り事上もなり
延文乃比ちる人も

本朝武林原始 卷之一 終

本朝武林原始

卷之一

終

本朝武林原始卷之二

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

本朝武林原始卷之二

弓矢之部

日夏繁高 著

兵家之所重弓矢而已不獨取其禦敵之用
以其觀宣德義不比佗技藝也今採錄體要
與故實而不私其祕藏以俟後學云

日本書紀天照大神振起弓彌

案古事記弓腹振立而萬葉集笠朝臣金村歌大
夫之弓上振起射都流矢乎後將見人者語繼金
又作者未詳大夫之弓上振起借高之野邊副

本朝武林原始

清照月夜可聞

大弓造工

日本書紀綏靖帝紀曰使弓部稚彥造弓金漆丹入

延喜式曰造弓一張料漆二勺弦象一兩二分彈絲

二銖附鹿革一條圓四寸

案考之日本紀垂仁帝紀又弓作と弓削部とあり

續日本紀養老六年三月條丹波國弓削部名麻呂

天平勝寶四年四月條弓削矢作とあり丹波粟田郡弓削の在り是

弓削部又古代ハ佐州とく弓を作り京師に在れる事

必更小あり東鑑曰下河邊庄司行平稱九國第一

進弓一張云云此弓於九國名譽之由兼以風聞

其主不慮之外沽卻之行平喜之折節著小袖二

領仍一領腕之替之云云仰曰行平日本無雙之

弓取也見知安弓之條不可過汝之眼然可為重

寶云云古代ハ射子と弓と矢は作り是を法射子

と稱之之和の比中は丹波と云弓作りあり紀伊山に

に神川と云弓作りあり此人大塔の文より是は弓に

兵部と云者乃末そ大塔の宮より傳へるは是は

あり後と云河内國の事と雖も是れすと云り近世

廣濟寺市紫田劫子部右衛門河内國守上守なり

天鹿兒弓

日本書紀高皇產靈尊賜天稚彥天鹿兒弓及天羽
羽矢以遣之纂疏曰天鹿兒弓一名天梘弓舊說云
採天香山之梘木為之故命曰鹿兒與香字其訓同
矣一說射麋之弓也誤分作鹿兒

天梘弓

日本書紀大伴連遠祖天忍日命帥來日部遠祖天
穗津大來目云云手把天梘弓天羽羽矢纂疏曰梘
章移反梘子木實可深黃和訓梘曰波志或云土師
氏所造之弓也

三角石弓

尾張風土記曰神日本磐余彥天皇東征之時討代
陽貴酋入歸化之場海部佩室臣奉射天皇天種子
命以三角石弓及玉大羽矢射殺佩室臣討終於海
部姓神學類聚鈔引之

桃弓

延喜式曰凡十二月晦日戌時追儼云云各執桃弓
鞞矢入立庭中俱作儼聲分出諸門又曰桃弓鞞矢
桃杖陰陽寮作進之也

梘弓

梓弓

檀弓

日本書紀曰菟道稚郎子知破椰臂等于泥能和多利珥

宇治和多利涅珥得渡多氏屢立阿豆瑤由瀨

梓麻由瀨伊枳羅牟苦射下略

三代實錄曰下符相摸國令採進槻弓百枝安房國

百枝信濃國梓弓二百枝但馬國檀弓百枝備中國

柘弓百枝備後國百枝

延喜式曰凡甲斐信濃兩國所進祈年料雜弓百八

十張甲斐國槻弓八十張大神宮式神寶條曰梓

二十四枝長各七尺下塗赤漆兵庫寮條曰梓弓

一張長七尺六寸長功十五日中功短功遞加一日

削成三日削一日小斧作本一日瑩理一日造附角裁

革纏附料理泉續弦著弓一日句本令熟三日塗漆

三遍每遍乾一日造附角長功日十枚中功日八枚

短功日六枚裁革附長功七十條中功六十條短功

四十五條纏附長功三十五張中功二十五張短功

十五張料理泉續弦長功五條中功四條短功三條

九錫彫弓九錫彫弓

東鑑曰建保二年六月廿一日午刻忠綱朝臣令進

件調度等於御所御車二兩中櫓九錫彫弓御裝束
御隨身裝束移鞍等也。是皆自仙洞被調下

十五波摩弓

日本某時記云年の始より皇子は破魔弓を射り活ける
世も成候志もさる志なりとて一はむし一射禮とて
正月より内裏より射る事乃ありしなり是は天皇
法御宇に大内少輔正月に弓を射りし事ありしなり
之もかゝる事なりとて下りけりといふ一は子の始
年也とる人もり候射りし事なり
素由りに在傳ふら矢演書何れもそと回彦火と出耳尊

此御子舊不合言いまご大ありておりし事なり
日向此演書めくしは流る祿をさうとせ夫をい
是を射る勢ありまゆ一はら一櫛なりぬ櫛れはさ
を志りしとめんしめなり初志とてま一浦せどもおん
そと一はめとてま一は公柱のびりし事なり
まをさる事なり代にいつとる事なりめにも一は
是をさる事なりさる事なりぬ櫛の役人たるなり
のうげ不居くたの方よりをぬくと勢をあらんをた
まよりけりしと声張合をぬげなげうては砂の上を
回りゆくと射ぬるなり是ら夫を海の始

塗弓

延喜式曰凡武官人等皆用漆弓其正月十七日大射節文官人亦同

案どるふ上古武官ハ漆弓を常に用ひしなり然野史ハ重藤弓節卷弓苗藤弓乃塗龍弓思塗海繪弓阿中我場ハ白木弓改月ひらり盛衰記に凌利余一ハ白木弓法振古かりふ白兔ナク兼二伏切府又鶴鳥弓り破合て矯るる証矢一ハ取添く参考を年記又本州孫田郎ハ白木に劍植あつ隊弓持あり

荒木弓

萬葉集葛木之其津彦真弓荒木爾毛憑也君之吾之名告兼

新六帖 弦をいぬあもきれ弓のそりさつて後ハ切く入りなり

東鑑鎮西以下諸國より進饗之荒木弓とあり

角弓

出雲風土記曰御祖神魂命子柁佐賣命願吾御子麻須羅神御子坐者所亡弓箭出來願坐爾時角弓矢隨水流也

日本書紀神功皇后四十六年百濟背古王奉角弓

續日本紀天平七年條曰入唐留學生從八位下上
 道朝臣真備絃纏漆角弓一張馬上飲水漆角弓一
 張露面漆四節角弓一張射甲箭二十侯平射箭十
 侯奉天皇

御多羅支

萬葉集 朝庭取撫賜夕庭伊与立之御執乃梓弓

之奈加弭之音爲奈利

仙覺抄曰さうさうといふは弓なりとさうさうといふは

みさうさうといふはさうさうといふは同肉相色のあり

日本紀名曰弓ハゆがと申畧也弦ハすぐなり也此ハ弓也

ゆがと申るものなりとさうさうといふ御執とさうさうといふ
 通すのぬにさうさうといふはさうさうといふはさうさうといふは
 さうさうといふはさうさうといふはさうさうといふはさうさうといふは
 物字之又古人流よと空の多羅葉之け七尺五寸あり弓弦
 多羅葉又七尺五寸ありさうさうといふはさうさうといふは
 天皇の事いささか多く傳はるる所現はさうさうといふはさうさう
 劍をみさうさうといふはさうさうといふはさうさうといふは
 案どりに古傳ハ少くありてさうさう神功皇后小媛三韓
 と討ふ時ら伝はるる事少くありてさうさうといふはさうさう
 といふはさうさうといふはさうさうといふはさうさうといふは

弓束

萬葉集

南淵之細川山立檀弓束級迄爾人爾不

所知 梓弓束卷易中見判更雖引君之隨意

入案由尔振草まをのづらまをのづらと抄やわり

保元物語

云鎮西八郎為朝五人張の弓長七尺五寸

まをのづら

盜意記より上下法執小角入るるまをのづら

本平記に大塔文三所藤比弓銀の執打を尺十文定

紫鳥打

平家物語

重藤弓のゆる打此紙紙の廣さ一寸をり

に切くた巻にまをのづらまをのづら今日まをのづら

見ると利 細置紙袋は丸土器下向奥

蓋意記より紅の紙を切て弓のまをのづら

まをのづら

弓袋

延喜式曰弓袋粉紫表緋裏帛各一條各長一丈一

尺廣八寸

又弦袋

軍防令曰每人弓一張弓弦袋一口副弦二條
東鑑曰白河院御宇永保三年九月陸奥守源朝臣
義家於奥州與將軍三郎武衡同四郎家衡等遂合
戰于時左兵衛尉義光候京都傳聞此事辭朝廷警
衛之當官解置弦袋於殿上潛下向奥州
平家物語云左兵衛尉家貞為青狩衣の下に箭袋
乃腹巻と著弦袋はきくると右刀拵拵んど
盛衰記云衛府官少々弦袋を賜ひたる兵衛尉ハ赤皮
右衛門尉ハ白牛革なり

太平記云青砥左衛門少佐の例ハ本朝考の弓袋ハ木
刀を拵とるるハ叙爵此後ハ皮を刀に弦袋付たりき
關弦
蓋兼記兼孫弓に因法りけりちとるるを成り兼弓に塗
りて

懷搦後 後鳥羽天皇 弓は後之保の因法よりきて
弓中ハ皮ハしき味
天素往來作懸坂弦関法
兼弓より系八坂より出り坂坂弦とす也

弦卷

玄惠庭訓云者本重者陰魂也兼少也加弦卷

案よりよ弦巻の号時史小之云

弩

弩ハ神功皇后奇功妙思成めぐ〜と製作一也

此ハ胡文粹少あり

三代實録曰鴈高宿禰松雄爲弩師以善作弩也

延喜式兵庫寮曰造弩一具單功六百三十三人

丁之三十三

村

弓を削る村といふ事古に是くは國史小弓削部

河内弓造云て村はるり少とわ〜と

業はるりに古代ハ村作といふ事なく射手〜削る

吉田六右衛門重勝入道雪斎村の名匠〜傑作

上村長治家藏雪斎村の弓武別高田是早稲田小橋

此弓は侍より故よ早稲田の銘あり林信智の記あり

早稲田弓記

大凡器逾百年則朽敗腐損至太甚者寥落不知

其所有者多矣其今古之變吾知器亦不能與世

久遠也嗚呼人情賤今而貴古故於器亦然矣何

其情之傾嚮一至於此哉以其希有之故乎以其

器良之故乎不以器良而以希有為貴者吾不取
之二者之際可以知焉日始見一弓于或人之手
以早稻田為銘早稻田者即武州高田邑中之一
村也此弓出此村是其所以取名也聞此弓吉田
雪荷者所造也雪荷者細川參議源忠興卿之家
臣而擅射者之名距今百有餘年人皆稱之而此
弓之強雖發矢千百亦不敢折云吾謂夫弓者武
備之器也若夫一弓雖歷數千年而存至于不能
鏃送者真無用之一物耳此弓之逾百年而不朽
敗腐損者希有之器而況於成用乎可謂器之良

者也此人之貴此弓者不亦宜乎證此弓者刑部
森某也乃學雪荷之射之徒也豈其偶然哉請記
于吾用題一語

正德元年辛卯臘月某日

退省散人林信智士彊甫識
案多々中系以來傑作の矢作の傑作
乃較能作如中宵乃教しと弓を又作ある
想ふと早稲田弓乃おと此作の弓を此作村を以て

日本書紀神代卷曰天羽羽矢真鹿兒矢綏靖帝紀

矢部作矢ハ師ハ天ハ延喜式曰造箭柳篋四百廿箭篋以時採乾簡取強好ハ

東鑑曰元曆三乙巳年六月五日囚人前廷尉季貞子息有源太宗季者後日爲子逸見冠者爲見季貞存亡密々下向是弓馬傳藝刺作矢達者也受矢野橘内所々只傳

鐙

日本書紀曰大伴連遠祖天忍日命帥來日部遠祖天穗津大來日云云手捉天梘弓天羽羽矢及副持

八目鳴鐙

萬葉集作者未詳木國之昔弓雄之響矢用鹿取拾穗抄曰類聚ハハガクヤトトト伊智

比何本爾梓弓ハ多婆佐彌比米加夫良伊智

新六帖杉の如きハ神矢小きハノ角鐙そと々海ノ平家物語乃波波余市ハ世古ハ切符の矢取切

引目

東鑑曰右大將家御時長沼五郎宗政只望給御引
目於海道十五個國中可紀行民間無禮之由令啓
之間被重武備忝給一御引目于今為蓬屋重寶
案此引目の号を代する所の所へ一物に引目と
正史實錄よるに下都家記に引目の神代より号
ありて引目此号ハ代り何れも備に引目ハ神代あり
古語拾遺等よるに見ゆに引目を代りて引目に
引目と云ふに引目ハ代り何れも備に引目ハ神代あり
めりて引目此号ハ代り何れも備に引目ハ神代あり
と其形ハ人代りの製法を引目と云ふに引目ハ神代あり

引目と云ふ事ハ引目ハ代り何れも備に引目ハ神代あり
と云ふに引目ハ代り何れも備に引目ハ神代あり
と云ふに引目ハ代り何れも備に引目ハ神代あり
と云ふに引目ハ代り何れも備に引目ハ神代あり

征箭

軍防令曰征箭五十隻胡篠一具
續日本紀曰延曆十年十月壬子仰東海東山二道
諸國令作征矢三万四千五百餘具
延喜式曰征箭五十隻長功二十二日大半中功二
十五日短功二十九日蒐麤搦大半日削節洗磨一
日精搦一日精磨半日料理羽搦線二日著羽六日

初漆并乾十日中漆一日乾一日裁羽大半日次中
漆一日花漆一日乾一日削箭本搓線纏一日打箭
鏃錯磨二日著箭鏃一日漆本三遍每遍乾一日金
漆箭鏃乾一日
案のりハ百葉集ニ抄ヒそノそトシカニモテ仙定抄
抄云ク云々ト云フ所ニ從之トあり

未利矢

日本書紀神功紀菟區踰瀨珥未利椰塢多具倍
釋日本紀曰菟區踰瀨珥機弓也久與伎五音通
未利椰塢私記曰師說曾矢也稱未利矢者甲冑之

間爾伊禮加久須也今世古津萬伽伎歟多具倍謂
具也弓與矢乎取具之義也

案ずハ未利矢ハ未呂矢也ト云フ
片手折矢

託宣集曰八幡現七十許老翁為白髮之體持白木
之弓以藤卷狩俣之矢立岡之上今放之給時言真
者波誰加射曾我禮計利古曾者如此言給射之坐
時中子將門之頸骨而被伐畢公家為累代寶物以
此藤卷片手折御矢被納內藏寮御庫者也
源集釋

丹塗矢

山事根原に於て小河邊に丹塗矢を流さる

火矢

日本書紀欽明帝十五年十二月攻新羅筑紫物部
莫奇委沙奇能射火箭

案より今井中島兼平備のうらぐ大坂今射守
事亦多物後少河也

野矢

参考保元物語為朝矢三腰を射るに口さくさる矢
一腰十のさくさる矢一腰九のさくさる矢一腰

平家物語於於柳中原泰定に重なる弓野矢を賜

東鑑建久元年十一月二品御入洛帶漆羽野矢給
嘉禎四年二月將軍入洛行列條下御乘替二人童

野矢候御輿右童征矢候御輿左仁治二年十一月
四日將軍家為武藏野開發御方違渡御于秋田城

介義景武藏國鶴見別莊御布衣御輿御力者三手
供奉著水干宿老帶野矢若輩為征矢建長二年八

月條將軍家命出由比浦給歲四十以後人々負征
矢四十未滿之輩帶野矢

侯野矢

平家物語於於柳中原泰定に重なる弓野矢を賜

東鑑曰建久元年九月十八日條佐々木三郎盛綱
 侯野矢一腰進上御上洛料也即覽之無文深羽以
 鵝目擗揆之藤口卷也以青鷺羽雁表矢是曩祖將
 軍天治年中命征伐奥州梟賊之後歸洛之日用此
 式云又飯富源太宗季作獻簇同歷御覽之所重端
 革逆也令問其由緒給宗季答申曰是故實也以赤
 革令重于表者頗相似平家赤旗亦標也重于下之
 条可然歟云又居蛇結文於腰充其風情珍重也
 平家物語に競ハ之威乃體著々星膏の標取あるは

作乃ちのをさささしは四さささる大中丞の矢員源口の骨
 法もなき下さや奪れぬとさささるの矢一守ささ
 さささる
 蓋兼記に體口の之を傷をけるささ白羽の矢は有さる
 たる
 礎頭
 太平記並置軍條足助は赤重範金徳改して荒尾は赤
 が青の赤向多拍の上二寸ささる射解く回山門改條相る
 白羽を束つたは東之階に金徳改を射る

平家物終に形以余多續て麻をいふの射切中判
めく舞もあしき武者及び中判の射り

を中判より中判に異中判の射切なる中判教多抜らる
一と云

案より中判ハ上判に對しと云案なり

節陰矢

平家記公家一統條下白晝より節陰なる中判少塗と鶴の
羽紙綴ぐる征矢

案より節陰は矢古代よりあるがしは正史に
護田鳥尾矢

盛衰記粟津合戦條本番ハ射浦より後田鳥尾矢負

く鴨越條島山ハ護田鳥尾矢負て三月月こつ小梨毛も
多りたる平家公遠最後條は教盛と保藤弓に十八

とつる後田鳥尾矢鶴毛馬に乘り

塗籠矢

盛衰記に義仲ハ赤地綿直垂より塗籠の矢負

手突矢

太平記曰妙觀院高因燔全村ハ篋のたさひるれ人の
目柄のさる程なること行をりつきた押刺と長船打
の碓めを撃ちて湖を苦奉りて中判打徹して福ら

すげ巻巻紙理を練をひく福を巻たをて三十六さしる
慶のふとくに負がししうそいも実りせんが為る

太平白磨銀等

太平記小巻巻紙理を練をひく福を巻たをて三十六さしる
之中玉の矢

木鐸

應仁記曰神保守家清の射安富氏部清の使志をきし
と射矢負の矢に束より矢矢く著陣せだる為木鐸と
し合力のこりける

葉山原の古傳書に射捨木鐸とあり

矢印

平家物語小巻巻より一刺むるをとおく和国小巻巻
こりけしあそむ付る

盛衰記に射矢一寸半とく三浦山太郎義益と焼巻し
しりきり

東鑑治承四年十一月條箭口卷之上注瀧口三郎
藤原經俊

本平記云此矢もあまふ河境とくく三人張り十五束
三伏ゆしと門渡し三門あひの旗立する所をさし遠
矢小射しるもあまふ河取るるあまふに相換團任人

本回孫郎重氏に小刀のききこてあつりし

得物矢

萬葉集 舍人娘子 大夫之得物矢手挿立向射

流圓方者見爾清潔之 山部赤人 足引之山毛

野毛御狩人得物矢手挾散動而有所見

仙覺抄曰少も矢を射り小らゆり立むいし射

小らゆりゆりし射りし矢を射りし

ふ

爪寄

萬葉集 梓弓爪夜部遠音下略

盛衰記に凌利余一ハ宗長が矢取とて

と此の盛衰も尋常に昔通ふ越ゆる但を思が

相應

作矢

作矢といふ事申葉以来の勢ありと傑作矢

と作の矢師と稱ありも細くも清くも

家藏作矢海東葉がゆりしと百通

真記曰佐々木承禎家藏無節琵琶羽矢

求得獻信長公云葉をたて

求得獻信長公云葉をたて

鏃

日本書紀綏靖帝紀曰倭鍛部天津真浦造真鑿鏃
釋日本紀曰兼方案之真者例文真實義鑿鏃者射
鹿子之鏃也

延喜大神宮式曰箭七百六十隻長一尺四寸鏃鋒
又曰造征矢五十雙鏃料鐵五斤七兩金漆五撮漆
三勺絲二分

参考保元物語小鎮西八郎為羽の矢根ハ楠破鏃金の
蠅の尾為
舌とあはれ鑿のぶくかり物をさうさわそに厚さ五分
廣さ一寸長さ八寸ハうさうさうさうさうさうさうさうさうさ

氷かじみどくささみぐさうり又云山鳥尾を以て作る
に七寸五分は丸根の長中過と茂代何ははあり

本草紀小秀郷ハ鏃の中五匹管わぞおとを〜小志る
まどろ物多様んぞ

古今銘盡大和國宮津入道宗忠伊豫國昭覺國吉
矢根上手也

案あつた鏃形大和天國柳葉備前則宗澤瀉備中
青江貞次笹葉山城粟田口國安鷲口同久國筭
甲斐重弘鷹鳴尾豊後有行牛角大和當麻友行
稻葉同則弘舌同弘村鶴背同包永杠谷樹平安

城信國、鋏山城、光重了、海近江、高木貞宗、鯖尾越
 中、義弘、鴨背、備後三原吉永、蟹爪、豐後行平、劔先
 加賀友重、獨鉦肥前、真長、枕杷、葉對馬、安光、銀杏
 葉相摸、正宗、劔先等也。紀伊國熊野、天狗伊豫國
 清次郎、越前國黑田高來、攝津國柱本丹波國口
 人各、鑛鍛冶也。熊野天狗、取作の鍛と、丹波、只と
 物又、能、作、石、取、形、あり、圓、白、赤、次、公、殊、と、稱、各
 一、あり、と、
 平題
 麻々伎

延喜式曰、梓弓一張、矢四具、角大伊多都伎一具、角
 細伊多都伎一具、木大伊多都伎一具、麻々伎各五
 十隻、爲一具、具別功五十人、鹿角本末各五十四隻
 伊多都伎、鐵十二兩二分、熟銅三分、
 伊多都伎、鐵十二兩二分、熟銅三分、
 料用上麻々伎、鐵
 料用三察家物、
 多、中、約、事、安、合、爲、忠、
 一、ゆ、を、さ、く、射、子、の、法、人、
 終、の、つ、つ、さ、は、ま、な、
 新撰六帖、今日、ハ、
 了、る、き、あ、
 日本書紀曰、天照大神、臂著、稜威之高、鞞、又曰、大伴

連遠祖天忍日命背負天磐鞞臂著稜威之高鞞應

神帝紀曰初天皇在孕而天神地祇授三韓既產之

完生腕上其形如鞞是熊皇太后為雄裝之負鞞此

故稱其名謂譽田天皇上古時俗謂廢武祭

大神宮鎮座傳記曰繫齋之日不聞鞞音

延喜大神宮式曰鞞二十四枚以鹿皮縫之胡粉塗以黑畫之納持麻等

二合徑一尺六寸 蒼緒一處用紫革長各一尺七寸廣二寸二分 兵

庫寮條熊革一條鞞料長九寸廣五寸 牛革一條鞞手料長五寸廣二寸

送官符曰御鞞口長四寸五分九徑四寸厚三寸塗

黑漆畫平文附村濃組有金銅金物鼈頭舊傳記引之

出雲風土記惠曇鄉者國形如畫鞞其形如畫鞞

萬葉集元明天皇 大夫之鞞乃音為奈利物部乃

大臣楯立思母

其のの備、汝らに曰十八日よらのるもの事あり也ハ

小くもさむもふちふのそくすといはれり

弓矢のしらやうもつるもくろくさぬらふめがれぬ事

西峯翁云鞞日本書紀等所謂稜威高鞞也神代卷

諸鈔以鞞為鞞者非也鞞鞞各別物也鞞者兎手物

也以皮作之右曰鞞左曰鐵蓋鐵蓋以鐵作之古此

亦以皮作之鞞者付鐵蓋物也古以皮作之如鞞可

觀吉部祕鈔，知之後以木作之，形如木魚，空其中，
皮付之，鐵蓋為鳴弦也。凡鳴弦者，下知衆亦以威敵
也。萬葉集所謂鞞音是也。後世以皮作鞞，以便彎弓，
取鞞矢也。以鐵作鐵蓋，不損手也。以避弦也。後世不
付鞞者，鐵蓋以代之也。

鞞袋

延喜式曰：鞞袋，料紫表緋裏，帛各一條。各長一尺三寸，廣一尺一寸。

鞞張

續日本紀：天平勝寶四年二月，條甲作弓作矢作，
續日本紀：天平勝寶四年二月，條甲作弓作矢作，
續日本紀：天平勝寶四年二月，條甲作弓作矢作，

削鞍作鞞張

鞞

江次第射場始，東置御矢臺，其上置鞞并弓懸，

案多不ゆげ，舊更に之をぞんごり，上をより，
案多不ゆげ，舊更に之をぞんごり，上をより，

一說日本武尊，
一說日本武尊，

鞞

日本書紀：神代卷，千箭鞞五百，箭鞞天磐鞞，神武帝

紀步鞞

延喜式：大神宮神寶，條曰：姬鞞二十四枚。長各二尺，
延喜式：大神宮神寶，條曰：姬鞞二十四枚。長各二尺，

六寸，下廣四寸五分，分矢，刺口方二寸九分，
六寸，下廣四寸五分，分矢，刺口方二寸九分，

用紫革長各二寸三分箭四百八十隻以鳥羽作之蒲勒二

十枚長各二尺上廣四寸五分下廣四寸以檜作之編蒲著表以鹿皮著頂以丹畫裏著緒四處

竝用紫革箭一千隻以鳥羽作之革勒二十四枚長各一尺八寸

上廣四寸五分下廣三寸八分以調布黏之塗黑漆著緒四處竝用紫革長各二尺

箭七百六十八隻以鷲羽作之

平家物語瀨尾最後條山勒

勒作

延喜式四時祭條勒者勒編氏作

姓氏錄曰勒編首神志波移命之後也

箭

日本書紀雄略帝紀曰征新羅將軍吉備臣尾代行

至吉備國過家後所率五百蝦夷等聞天皇崩乃相

謂之曰領制吾國天皇既崩時不可失也乃相聚結

侵寇傍郡於是尾代從家來會蝦夷於娑婆水門合

戰而射蝦夷等或踊或伏能避脫箭終不可射是以

尾代空彈弓弦於海濱上射以踊伏者二隊二囊之

箭既盡即喚船人索箭船人恐而自退

江次第壺胡錄平胡錄

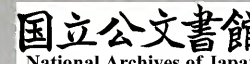
延喜式曰造胡錄一口料黑葛一斤漆三勺絳一分

緒料鹿革長四尺廣五寸

東鑑曰近衛司相交平胡錄差様丸緒付様不分明
之處三浦介預囚人武藤小次郎資頼彼矢事得古
實之由發言

案内より能く其のいり相すべしといふべし
抄に勅にたゞれおとのねよやかぐひとあり
能く其のいり相すべしといふべし
のいり相すべしといふべし
年中行事哥合為忠 志びらふら何やむをき
そへく孝徳のまらとらやむらん

雲守泉下志比良ハ背の轉語なり
物ハあるべし
之れ家の比なり
志比良の事
志びらふら何やむをき
筑紫程冊の中
志比良の事
志びらふら何やむをき
ける花鳥の事



太平記は梶原景時正忠、後田小次郎、花房侯正忠、藤原正忠、
小次郎のついでに討たるる後、あつた剛の者や、彼とつて者
庭うんぬんを、花房知れぬとて、是をたつた梅花を、一枝折
て、あつたつと上には、さうして、いふ所の、吉一谷の合戦
う、二谷の戦、さうして、花房揚、梶原景時、三景時が、さう
あつたつと、うんぬんを、花房知れぬとて、是をたつた梅花を、
一枝折て、あつたつと上には、さうして、いふ所の、吉一谷の合戦

矢立硯

平家物語は、景時、あつたつと、の中より、矢立取が、
小次郎、さうして、

太平記は、花房、妙玄、體の、いふ、さうして、矢立の、あつたつと、

とね

方立

矢把

平家物語は、景時、あつたつと、の中より、小次郎、
あつたつと、さうして、いふ所の、吉一谷の合戦、
太平記は、花房、妙玄、體の、いふ、さうして、矢立の、
あつたつと、

調度掛

花房、景時、あつたつと、の中より、小次郎、
あつたつと、さうして、いふ所の、吉一谷の合戦、
太平記は、花房、妙玄、體の、いふ、さうして、矢立の、
あつたつと、

今昔物語不夜夜もさるまは門を叩ききりしに貞盛を
盗人なりしと云ふに細及と云ふ又云いつしを兵相
成有るくよにさるふ多き又云敵のよをさるるに細及の
馬は鞍道標ふの布持

東鑑調度掛役

重子乃細及掛役の器なりと云ふ或書曰右大将家
文治六年式調度掛役の形なりと云ふ又云越之河
佐重は時夫十三筋し是は重子飾細及掛を重子乃家
乃時格と云ふも重子乃家なり

矢籠

太平記曰必任人須々本所より強らるの矢はさ早人の
解捨くろ蔵瓦落美衣掃抱むるも集く矢俾をさる
射よりなる

敷革

東鑑曰正治三年正月十二日御的始也云 射手十
二人相分于弓場左右候敷皮

行騰

衣服令曰兵衛督赤皮靴錦行騰 謂騰織所以雲股
脛令衣多不中飛揚者
也

年中行事合該射為忠 六月西ノ懸れ等

文章正木原如 卷之二

今よのきくのり射多や宿り如人

夏野心せむのり如人

原毛かくさるる如人



本朝武林原始卷之二終

